

日本体育学会
体育哲学専門分科会

会報

Vol.14 (1), May, 2010

記事

巻頭言
体育哲学考
書籍紹介
私の研究
体育哲学専門分科会定例研究会のお
知らせ
箱根合宿研究会のお知らせ
運営委員会からのお知らせ
次号予告

巻頭言

「ナショナル」と「トランスナショナル」：
2010年バンクーバー冬季大会の様態

舩本直文(首都大学東京)

2010年はバンクーバーのオリンピック達の活躍で幕を開けた。メダルラッシュに沸く開催国カナダの人々のほかに、日本選手団では高橋大輔や浅田真央のフィギュアスケート陣と長島圭一郎や加藤条治らのスピードスケート陣の活躍が話題を呼んだ。しかし、実は国籍を超えるアスリート達や指導者達が多く見られた大会でもあった。例えば、フィギュアスケートペアの川口悠子とアレクサンドル・スミルノフ組は川口悠子がロシアに国籍を変えてロシア代表として出場していた。女子フィギュアスケートの長州未来は両親が日本人で日本と米国の2カ国の国籍を持つが、彼女は米国代表として出場し4位に食い込む活躍を見せた。アイスダンスでもリード3兄弟の国籍が話題をよんだ。この3人はアメリカ在住であるが、キャシー・リードとクリス・リードのペアは日本代表として、アリソン・リードはグルジア代表としてオリンピックに出場したのである。このようなアスリート達の様々な国籍変更以前に、コーチや指導者達のディアスポラぶりは既におなじみである。浅田真央が指導を受けたタチアナ・タラソワコーチはロシア人、キム・ヨナのコーチであるブライアン・オーサーはカナダ人である。日本のモーグルやジャンプ陣のコーチも外国人の面々であることも知られている。このような多様な国籍の変更や選択、あるいは指導者達の国を超えた指導が当たり前になってきているが、これを単にグローバル時代の帰結と片付けていいのであろうか？オリンピックというものを支えるオリंपィズムという思想が「トランスナショナル」な平和主義を標榜する故の現象であらうか？

このような疑問は、「ナショナル・アイデンティティ」という表現についても再考を促されることになる。オリンピックやワールドカップで当たり前のように「日本選手」を応援してしまうのは、それが、我々観客が「日本人というアイデンティティ」を確認する自然な態度であるからということなのであろうか？今回のようなオリンピック達の国籍変更によってこのアイデンティティ確認装置という機能が揺らいではいないであらうか？さらに「日本代表選手という言い様は正確な表現なのであろうか？」という気にもさせられる。IOCが掲げているオリンピック憲章には、「オリンピック競技大会は、個人種目または団体種目での選手間の競争であり、国家間の競争ではない。オリンピック競技大会では、各NOCによって選ばれ、IOCがその参加を認めた選手たちが一堂に会する。The Olympic Games are competitions between athletes in individual or team events and not between

countries. They bring together the athletes selected by their respective NOCs, whose entries have been accepted by the IOC.」(6-1)と規定されている。つまり各国の NOC が選考し IOC が認めた選手がオリンピックに出場できるが、それが直接「国を代表して戦っている」ということではないのである。しかし、リード兄弟の演技を見ながら日本代表という気がしないのはこのような背景があるのかもしれないが、それ以上に「なぜ彼らが日本代表なのだ」「なぜ奇妙な着物姿の演技？」などの素朴な疑問のほうが先にたっているのではないであろうか。

ここには、ナショナリズム、インターナショナリズム、トランスナショナリズム、パトリオティズム（愛国心）などについて考えさせられる材料がふんだんに存在していると言えそうである。また、バンクーバーの各会場や街中でみられた“Go Canada Go!”という声援は愛国心の発露なのであろうか、ナショナリズムの発露なのであろうか？“Own the Podium”というメダルを独占しようというカナダのスポーツ振興策は、勝利至上主義とナショナリズムを煽ったのであろうか？閉会式で見られるおなじみの国別ではないアスリート達の入場行進は、オリンピックの標榜する「トランスナショナリズム」を表したいのであろうか、実際にはこの高邁な理想主義とは異なり、各国選手団は固まって入場していたのではないか。さらに日本のメディアは特設カメラを持ち込み、日本選手ばかりを映し出していた。メディアが日本人選手だけに興味を持たせるように仕向けているのであり、「ナショナルなもの」だけへの関心が醸成される仕掛けになっている。ここには1964年の東京大会の閉会式とは大きな違いが見られた。本来ならば「トランスナショナルなもの」への関心が醸成される仕組み、再生産される仕組みが日本のオリンピック・ムーブメントには必要とされるのである。しかし、オリンピックたちやコーチたちの国籍の超越ぶりをみるにつけ、「ナショナルなもの」と「トランスナショナルなもの」、あるいは「ナショナルなアイデンティティ」を確認する装置などという表現の枠組みを打破しつつあるのがオリンピックの世界の現状であるようである。

(舛本直文 naomasumoto@tmu.ac.jp)

体育哲学考

「ポストモダン」のその後と「体育」哲学

釜崎 太(立正大学)

改めて指摘するまでもなく、近代に「physical education」の訳語として成立した「体育」の概念は、その基底詞である「教育」が意味の中心を担っている。

周知の言い回しを、あえて冒頭に持ち出したのには理由がある。「体育」を論じようとする私たちが、教育の現状とその研究動向に注意を払っておくことの必要性を、改めて確認したかったからである。

日本の教育研究は、80年代のいわゆるポストモダンの受容以降、その方向性を大きく転換させてきた。ポストモダンのインパクトの大きさは、「教育に関することで自明なことは、もはや何一つないことが自明になった」という(アドルノに倣った)今井康雄の言葉に端的に示されている。

そのポストモダンに思想的裏付けを与えたのが「ポスト構造主義」と呼ばれる現代哲学の潮流であった。構造主義の革新性が「文化の相対性(西洋と東洋の文化の価値に序列はない)」の指摘にあったとすれば、ポスト構造主義の革新性は、価値の序列がないはずの文化に価値の序列をつけてきた「(身体をめぐる)力」の存在の指摘にあった。近代泳法の裏

側で、日本泳法が忘却されてきたのはなぜか、という問いである。ブルデューが「二つの権力」と表現するように、正統な文化の範囲を決定し、それを押しつける「力」をもつ学校は、文化に価値の序列を付与する、近代的な制度である。

確かに、今日、思想的潮流としてのポストモダンはずでに退位させられた感がある。その指摘が学校を解体するだけの「絶望の言説」に陥ってしまったからである。今日の教育研究においてポストモダンはむしろ、「ポストモダンの社会状況」や「学級崩壊というポストモダンの現象」というように、現状認識の言葉として使用される傾向にある。つまり、不登校や学級崩壊などの原因が「ポストモダンの状況」に求められているのである。学歴が上昇移動を保障しえなくなった80年代以降、子どもたちは苦しみに耐えて勉強(近代的価値)することの意味を見失い、学校は「教育問題を解決する場所」から「教育問題を生み出す場所」へと反転してきた(学校がなければ、いじめ、不登校、学級崩壊などもありえない!)。実践現場の教師たちにとって最「善」であるはずの学校が、まさに諸「悪」の根源となっているのである(もはや自明なことは何一つない!)

もちろん、実践の課題に応えることを基本原理とせざるをえない体育研究には、現場の動向に応じて古典的なテキストを解釈し、お墨つきを与えるといった傾向がはらまれやすい。しかし、ポストモダンの閉塞状況のなかで実効力をもちうる体育研究を確立させるためには、実践現場の問題から距離を取りつつ、体育研究が使命とする「体育をどうするか」という問いに答えていかなければならない。そのためには、実践の現場で問題と感じられていることを取り上げるのではなく、現場の深層に潜んでいる問題を可視化させる努力が不可欠だ。体育哲学の領域では、例えば、近代の体育思想が現代の教育問題の根源となっていることを解明しながら、過去の体育思想と現代の教育現実を結びつける「体育思想史研究(体育思想批判)」といった試みが想定されよう。

もちろん、研究の具体的な展開は多様でありうる。だが、いま、「体育」哲学に、ポストモダンの閉塞状況の打破を展望しうる、そうした意味において、近代的な通念を異化しうる、新しい体育概念の構築(体育の再定義、あるいは「クリティカルな知」)が求められていることは、間違いない。

(釜崎 太 kamasaki@ris.ac.jp)

書籍紹介

中沢新一・波多野一郎(2008)『イカの哲学』(集英社新書)
深澤浩洋(電気通信大学)

万年筆と原稿用紙から、ワープロ、パソコンへと執筆道具の主役が移ってきたことで、書きやすい環境が整ってきたといえる。だが一方、多様なメディア(Web, 電子書籍, ケータイ小説等々)が登場し、本が売れなくなったと言われて久しい。専門書・学術書が売れなくなる中、書き手が向かった先の一つが新書の類ではないかと推察する。それは、この十数年で新たに新書を刊行する出版社が増えてきたことから窺えよう。

自身も大学生協の書籍コーナーに行くと、必ずといってよいほど新書の棚の前に佇む(それは理工系の専門書ばかりで人文社会科学系の書籍が皆無という特殊事情のためなのだが)。学生には、せめて新書ぐらいは自腹で買って欲しいとの思いから、教科書や参考書に指定し、ゼミでも活用している。例えば、鷲田小彌太(1999)『入門・論文の書き方』(PHP新書)には、論文のテーマの決め方から文献資料の集め方、書き始めるまでの準備、論文構成や執筆の仕方、注の付け方などが要領よくまとめられていて、卒業研究に取り掛かる頃のゼミで使用している(が、現在品切れとのこと)。また、(こちらも品切れのようで恐

縮だが)山内志朗(2001)『ぎりぎり合格への論文マニュアル』(平凡社新書)は、テーマ設定に関わる問題意識の持ち方やタイトルの付け方(実例とコメントつき)が大変参考になる。ただ、品切れの新書を指定するのめいかなものかと思ひ、最近では卒業生の置き土産となってしまった前述の二冊を貸与し、他のものを併用している。それが、樋口裕一(2003)『ホンモノの思考力 - 口ぐせで鍛える論理の技術』(集英社新書)である(姉妹品として『ホンモノの文章力』というものもある)。西洋人がなぜ論理的にみえるかを考えた中から導いた「二項対立思考・型思考・背伸び思考」という方法論が紹介されている。二項対立思考は、カテゴリカルに事象を判別する方法と解釈することができ、学生にも理解しやすい。また、型思考における「メモの型」は、文献内容的確な把握に役立ち、「論述の型」に基づけば、自身の主張を展開する助けとなる。そして、背伸び思考をオリジナルな主張を展開することと解釈すれば、それは、論文を書く上で重要なポイントであることが分かる。

・・・と、こうしてみると、新書の得意分野はやはりハウツーものなのかと思ってしまうので、今度は別の角度から何か一冊取り上げてみたいのだが、質量ともに充実している新書の中から、これは、といえる一冊を選び出すのは至難の業。そこで、若干変化球気味に取り上げるのが、中沢新一・波多野一郎(2008)『イカの哲学』(集英社新書)である。

いかにも謎めいたタイトルの本書は、特攻隊の生き残りで在野の哲学者であった波多野の同名の著書の中沢が復刻し、解説を付したものである。

波多野は、学徒兵として召集された際、大学山岳部でのヒマラヤ遠征の夢が潰えたことから、どうせ間もなくあの世に行くなら、その前に高性能機を操って空からそれを眺めてみたいと夢想し航空隊を志願した。しかし、出撃前日に突如ソ連軍の侵攻を受け、日本軍司令部は混乱し、彼への出発命令が下されないまま終戦を迎える。ほどなくしてソ連軍の捕虜となり、地下300メートル、氷点下40度という極寒の炭鉱での強制重労働を4年に渡り経験し、徹底的な共産主義化教育を施される。が、彼は対極にあるアメリカの生活を確かめるまではこれを受け入れられない、と、シベリア抑留状態におかれながらもアメリカ留学を夢見るのである。

帰国を果たし家業を継ぐかと期待された波多野だったが、己の意志を貫き昭和26年に渡米、スタンフォード大学大学院哲学科に入学し、プラグマティズムを学ぶ。そして、夏休みに入り、学費を稼ぐため彼は太平洋沿いのとある魚河岸でアルバイトを始める。彼の仕事は、水揚げされたイカを箱詰めし冷凍庫に送り込む作業である。1日に6,7トンを処理する10時間以上に及ぶ作業であったが、シベリアの強制労働に比べれば天国に思われた。

彼は、おびたしい数のイカと向き合う中で、あるいは休憩中に、これまでの自身の経験を振り返る。特攻隊での壮行の酒宴に違和感を覚え、唯一孤独になれるトイレの中で悟ったことが(今となっては叶わぬ)わが子を残すことであつたり、強制労働と飢餓の中で動物状態に陥りやがて共産主義に染められる仲間の傍らで、そうした態度を保留したり、死と向き合う中でなされた、実存をめぐる自問自答を回想する。

そして、政治思想や何々イズムとも無縁なイカを時にうらやましく思いながら、掬いあげた手網からこぼれた1杯のイカを重々しい手つきで拾い上げようとした時、ふと、そのイカと目があつたような気がし、そこからイカの存在理由について思索を始める。生命ある一個の実存としてのイカと商品としてのイカ、一回の投網と一個の原子爆弾、資源確保のための戦いと思想・何々イズムの相違に起因する戦争・・・という具合に波多野の二項対立思考は広がりを見せる。それは、ヒューマニズムの思想との対立項を見出すに至り、

加えて、ヒューマニズムでさえ戦争の抑止力はなく、平和への鍵はお互いの実存に触れ合うところに見出されるだろうとの彼の見解を導き出す。

「イカの哲学」全文は、本書の五分の程度であり、残りは中沢による解説で占められている。彼は、波多野に触発され、エコロジー論と平和学との接続を着想する。われわれは、そこからスポーツによる平和運動の説得力について検討してみることができるかもしれない。また、中沢は、イカが人間並みの複雑な眼球と、それに比してあまりに単純な脳の構造を備えていることに注目し、「イカという生物は自分のためにではなく、自分を包みこんでいる、自分よりも大きな存在のために、地球の観察を続けているバイオカメラなのだ、と考へたくなるほどである」と述べる。イカの過剰な眼球のように、アスリートが発達させた過剰な身体は、通常では捉えることのない何ものかを見つめることができるかもしれない、と想像をめぐらせてみるのも面白い。

(深澤浩洋 fukasawa@hc.uec.ac.jp)

私の研究

武道の文化性とは何か

田井健太郎(東京医科歯科大学)

2011年度より新しい学習指導要領が施行される。「伝統文化」や「道徳」の要素が盛り込まれ、中学校保健体育科では、武道が必修科目として扱われることになった。目指されているのは、「武道に主体的に取り組むとともに、相手を尊重し、礼法などの伝統的な行動の仕方を大切にしようとする」ということや「伝統的な考え方」の理解ということになるであろうか。ここに言う「伝統的な行動の仕方」とは、日本の中で培われてきた独自の身体運動形式のことであろう。本会会員諸先生には改めて語るまでもないが、世界中のあらゆる地域の生活世界には、それぞれに固有の文化的特殊性を帯びた身体技法があり、当然のことながら我々の社会にも固有の身体運動形式は存在するはずである。武道に求められているのは、その再発見という仕事であるが、とりわけ、球技やダンスなどの種目がおおむね「互いに協力」することを目標とするのに対し、武道は「互いに相手を尊重」することを掲げており、単なる運動形式を超越して、いわば倫理的な貢献を期待されていることが注目される。

これまでの武道研究では、武道の持つ特異性の起源を近代に求めるものが主流となってきた。たとえば、「術から道へ」というテーマで論ぜられる内容は、近世の「武術」が近代化を果たし、「武道」と呼称されるまでの過程を歴史的な観点から明らかにしようとするものである。それは、近世までの殺伐とした武術・武芸が、技術の習得と人格的・道徳的価値の涵養と結びつき、「武道」へと変容したことに「武道の誕生」を見るものである。もちろん、こうした論説に共通する前提は、殺伐とした戦闘術である武術・武芸が近世にあったという認識である。

しかし、既に徳川幕府の成立以来、武技の現実的な必要度が著しく低下したであろうことは、比較的容易に推測される。当代を生きた人々も、中世までの戦乱とは一線を画す泰平の時期が到来したことを実感していたであろう。そうした時期に、従来の近代武道研究が示すような殺傷を主眼とする「武術」が存在していたといいうる根拠は十分ではない。現在、「武道の誕生」の特徴としては、組織や体系の近代化と並んで、修行に教育的価値が付与されたことに求められているが、その素地も泰平の世における「武」の在り方にその基盤を見出せるのではないかと。近世の「武」を明らかにすることは、現在の教育が説く「伝統的な考え方」や「伝統的な行動の仕方」を明確にすることにもつながるだろう。

これまで武道は、現代社会における特異な身体運動文化とされてきたが、その内実は依

然言語化されていない。しかしながら、その社会的価値は、漠然とながらも、一定の評価を得てきたし、ますます国際化の度合を強めているスポーツや身体教育に対する批判的な視座となることをも期待されている。今まさに、多様な文化の重要性が見直されつつあり、武道もまた、こうした流れの中で、あらためてその文化的淵源を問い直されているのである。武道の文化性の再把握は、身体運動文化のグローバル性とローカル性を見つめ直すトランス・ナショナルな視点を育むこととなるだろう。

(田井健太郎 taiklas@tmd.ac.jp)

体育哲学専門分科会定例研究会のお知らせ

舛本直文(首都大学東京)

平成 22 年度第 1 回定例研究会を 2010 年 5 月 15 日(土)に下記の要領で開催いたします。

なお、研究会終了後 17:30 時より懇親会を予定しております。会員の皆様ぜひともご参集ください。

- ・日 時 2010 年 5 月 15 日(土) 15:00~17:00
- ・会 場 立正大学大崎キャンパス 11 号館(11 階第 5 会議室 A)
大崎駅・五反田駅から徒歩 5 分、大崎広小路駅から徒歩 1 分
(大崎駅/JR 山手線・湘南新宿ライン・埼京線・りんかい線)
(五反田駅/JR 山手線・都営地下鉄浅草線)(大崎広小路駅/東急池上線)
山手通り沿い、大崎警察署の隣です(お問い合わせは 090-4207-7376 釜崎まで)

演題 1 子どもの身体練習における潜在的ニーズに関する研究

千葉洋平(電気通信大学)

現在の小学生は、集中力や自己表現、物の管理や集団行動など、あらゆる面で発達課題を抱えている。そして、子どもの全面的な発育発達の達成には、体育の授業のみならず、生活全般をも視野に入れた取り組みが必要とされる。例えば、掃除をすることは、単に子どもたちの指先を器用にするだけではなく、計画や見通し、注意判断、あるいは創造という精神発達の機会にもつながる。

発表当日は、現場教員に対して行ったアンケート結果及びインタビュー調査の結果、さらには、これまで調べた先行研究の概要を提示し、子どもたちの運動プログラムや日常生活の内容について検討していきたい。

演題 2 「体育・スポーツ」のメタ見方 「体育・スポーツの哲学的見方」の見方

久保正秋(東海大学)

本発表は、この 4 月に刊行された「体育・スポーツの哲学的見方」(東海大学出版)という書籍を、著者自身が論評する、という稀代未聞の企画である。まず最初に、このような書籍が刊行された背景について語る。ここでは「体育」という名称の学部の現状と出版業界の思惑とが論じられる。次に書籍の構成と概要を語る。ここでは書籍のタイトルにある「哲学的」という言葉のねらいと意味、「二段階レベル+コラム」という構成について論じられる。そして最後に、著者自身がその著書を批判的に検討する。

夏期合宿研究会 in HAKONE

深澤浩洋(電気通信大学)

本年度も下記の要領で夏期合宿研究会を開催します。今回も土日・祝日(海の日)を日程に組みました。また、特別企画につきまして、企画案を募集します。奮ってご参加下さい。

深澤浩洋(合宿研究会担当:電気通信大学)

期日:2010年7月17日(土),18日(日),19日(月,祝日)

場所:静雲荘(住所)〒250-0408 神奈川県足柄下郡箱根町強羅 1320

(電話)0460-82-3591

小田原駅より箱根登山鉄道にて終点・強羅下車/改札口を出て右手地下道をくぐり直進/道なりに左にカーブする坂道を約120m登った右手にあります。

日程表(申込みの状況によって、多少変更になることがあります)

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
17日(土)						受付	研究会					夕食*		
18日(日)	朝食		研究会			昼食**	研究会					懇親会		
19日(月)	朝食		研究会		事務協議	解散								

(*は次期運営委員の会,**は運営委員会)

特別企画:企画募集

昨年まで実施してまいりましたラウンドテーブル形式でも、その他の形式でも結構です。企画に関するご提案・ご意見をお寄せください。深澤 fukasawa@hc.uec.ac.jp までよろしくお願ひいたします。

費用:22,000円(予定,去年と同額)

- ・研究会参加費:3,000円
- ・宿泊費等:19,000円(全日程参加の場合/2泊朝夕食,懇親会費を含む)
- ・シングルでの宿泊も申し受けます(先着3名まで,追加料金:1泊2,000円)
- ・学生,院生,研究生には若干の宿泊費の補助があります。奮ってご参加下さい。

6月21日(月)必着にてお申込み下さい。

- ・Eメール:お名前,ご所属,連絡先,発表演題,宿泊のご予定(食事の有無を含む)について,深澤委員 fukasawa@hc.uec.ac.jp までお知らせください。
- ・同封のハガキ:必要事項の記入と50円切手を貼付の上,送付してください。
- ・特に,部分参加の場合は,宿泊および食事の要・不要について正確にお知らせ下さい。
[17夕食,17宿泊,18朝食,18昼食,18夕食,18宿泊,19朝食]
- ・参加予定に変更が生じた場合は,速やかに担当者までご連絡下さい。
- ・7月8日(金)以降のキャンセルについては不泊料金が必要となります。

詳しい「プログラム」は,7月2日頃にお送りする予定です。

夏期合宿研究会担当運営委員:深澤浩洋

〒182-8585 東京都調布市調布ヶ丘1-5-1 電気通信大学

E-mail: fukasawa@hc.uec.ac.jp Tel:042-443-5584(研究室直通) Fax:042-443-5590

お問い合わせは,なるべくE-mailまたはファクスをご利用下さい。

運営委員会からのお知らせ

新保淳(静岡大学)

「日本体育学会 61 回大会」について、たびたび情報提供させていただいておりますが、再び、情報をお知らせいたします。

本年度の学会大会の HP は、下記の URL にて閲覧することができます。

<http://www.jspehss61-chukyo.com/index.htm>

「締切日」は、

大会参加申込：5 月 10 日（月）

予稿集原稿：5 月 10 日（月）

大会参加費：5 月 20 日（水）

発表取消・演者変更：5 月 28 日（金）

第 61 回大会の参加受けおよび演題受付は、5 月 10 日をもって終了し、「延長は一切ありません」ということですので、これらの期日を忘れることなく、多くの方々の参加、発表をお願いする次第です。

「分科会メーリングリストへのご登録のお願い」

メーリングリストへ登録済みの方へはメーリングリストによって会報が配信されております。速報性、経済性、分科会活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げる次第です。次のような手順で登録できます。

- 1) グループへ参加するには、事務局 ehashin@ipc.shizuoka.ac.jp までご一報ください。
- 2) 登録完了後、taiikutetsugaku@yahoogroups.jp を用いてグループメンバーにメッセージを配信することができます。
- 3) [taiikutetsugaku]グループについてのお問い合わせグループ管理者（事務局）：
taiikutetsugaku-owner@yahoogroups.jp

次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は釜崎太（立正大学：kamasaki@ris.ac.jp）までお問い合わせ下さい。

体育哲学専門分科会報第 14 巻第 1 号

発行者 日本体育学会体育哲学専門分科会

大橋道雄（会長）

編集者 阿部悟郎（広報委員長）

発行日 平成 22 年 4 月 20 日

連絡先 989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南 2-2-18

仙台大学体育学部

0224-55-1147（直通）

アドレス：gr-abe@scn.ac.jp

【編集後記】

春のキャンパスはなにやら目映い。この目映さは桜の彩り？いや、おそらく新入生や在学生の内に秘められつつも躍動する希望の輝き。春の新たな始まりは、常に希望とともに輝く。そんな輝きの春は、学会大会の一般研究発表エントリーの季節。そして、夏期合宿研究会の参加・発表申込の季節。迫り来る後進諸氏の輝きにまけぬよう、方々、まずは研究のご披露を。ご発表はイカが？ご決心の春。(A 拜)